

《抄 訳》

ドリス・レッシング 『ロンドンの地下鉄』

(訳) 松 村 豊 子*

解 題

ドリス・レッシングが南アフリカから父母の故郷であるロンドンへ戻ったのは第二次世界大戦終結後の1950年である。ここに訳出した「ロンドンの地下鉄」はそれからおよそ40年を経た1987年に発表されたエッセイである。原題は“In Defense of the Underground”。直訳すると、「地下鉄の擁護」になるが、作品内容が自宅近くの最寄駅から地下鉄に乗ってロンドン中心部へ向かう往復の旅で見聞きしたこと、また、地下鉄沿線の駅に関する歴史的・文化的回想であり、特に地下鉄擁護を目的にしている訳ではないので、ここでは「ロンドンの地下鉄」と訳した。ここでレッシングが使用する地下鉄路線は1979年に開通した Jubilee Line (Jubilee Line) である。この路線は第1次世界大戦終結後の郊外への人口移動が激化し始めた1930年代以降、メトロポリタン鉄道(1863年にロンドンで開通した初めての地下鉄として有名)の支線として開発された。名前の由来はエリザベス2世の戴冠25周年記念(Silver Jubilee)にある。

語りの大枠は語り手が最寄駅であるウェスト・ハムステッド駅から乗車し、フィンチリー・ロード駅。セント・ジョンズ・ウッド駅、ペーカー・ストリート駅、グリーン・パーク駅を経てチャリング・クロス駅で下車し、帰路に着く地下鉄乗車

の行程である。このように言及される駅名を列挙すると本篇は巷に溢れる観光案内書の1つに聞こえるが、情景描写は人とモノの活気溢れる混交を中心としており、労働者階級のアジア人の喧騒に始まりヴィクトリア朝の職人技の礼賛で終わる。レッシングは沿線の駅周辺の歴史的变化と混雑する現在の車内及び諸般の生活事情を具体的経験談を交えながら静かに淡々と語っている。現在は高級住宅地として知られるウェスト・ハムステッド駅からチャリング・クロス駅までの片道所要時間はおよそ15分。実際の乗車時間はこのように極めて短い。彼女が想像する世界は時間的には大英帝国全盛時代の19世紀から20世紀の2つの世界大戦を経てグローバリゼーション真っ只中の現在(執筆時の1987年秋)に至る。また、空間的にはイギリス国内や欧米に止まらず、アラブ人やインド人や日本人といったアジアにまで広がる。レッシングは豊かな読書経験と植民地体験を活かし、日々の生活における現在の急激な変化を過去の歴史的関係性を見失わずに前向きにとらえているのである。彼女の冷徹な視座は、グローバル化の大きな波に晒され、混迷の危機に陥りつつある社会事情に積極的な将来的展望を与える有益な指標になると考え、日本語に訳した。

本作品を一読して驚いたことは南ローデシア(現ジンバブエ)から第2次世界大戦後の破壊と混乱の真っただ中であつたロンドンへ上京して間もない頃の戸惑いと不安を主題にした『イギリス人を探して』(*In Pursuit of the English* 1960)に描かれる他者の視点から捉えたロンドン像と、

* 江戸川大学 情報文化学科教授

慣れ親しんだ住民の目で捉えられる本作品で描かれるそれとの差異である。まず、前作で描かれるロンドンがポスト植民地主義運動を経た 20 世紀のものではなく、植民地主義全盛の 19 世紀のものであることを指摘したい。1949 年にレッシングが描いたロンドンは「ぞっとするほど醜悪で、すぐにも逃げ出したくなるような都会」(28) であり、アフリカ南部の草原で慣れ親しんだ「自然の音」がなく、「あらゆる物から湿った臭気」(28) を感じた。ロンドンにおけるレッシングの疎外感は『イギリス人を探して』では否めず、彼女はロンドンに住む人々の生活習慣の偏狭さが 200 年以上も昔のヴィクトリア朝のそれと大差ないことにも言及している。当時のロンドンでは人々は教区すなわち日本語で言うところの「世間」を越えて行動することは稀だった(90)。例えばロンドンを案内するという知人ローズのことを次のように述べている。「ローズのロンドンは彼女が生まれ育ち、信頼できる人が住んでいる半マイル四方」(94) だった。生まれ育った家の半マイル四方と言うと、イギリス小説の伝統的な背景の 1 つである教区を連想する。『イギリス人を探して』より 100 年以上前のロンドンを描いたヴィクトリア朝の小説家チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens 1812-70) の処女作『オリバー・トゥイスト』(*Oliver Twist* 1836) はミュージカルになり、日本でも有名だが、その副題は「教区の少年」(Parish Boy) である。島国であるイギリスの文化的偏狭さがヴィクトリア朝において特に顕著であったことは周知のことであるが、ディケンズは最後の小説である『我らが共通の友』(*Our Mutual Friend* 1864-5) においてもヴィクトリア朝の繁栄を支えた中産階級の典型的な人物としてポズナップ氏を創造し、痛烈な批判をしている。

ポズナップ氏の世界は精神的な面から見てあまり広いものではなかった、いや地理的に見てもそうだった。彼の商売は他国との取引で成り立っていたのに、イギリス以外の国々なんてものは(取引という大事な点は別として)なにかの間違いで出来たものだと思っていたし、他国

の風俗習慣なんてものは一言のもとに「非英国的だ！」と決めつける、すると、あーら不思議！彼の顔面の交渉と腕のひと振りとともに、それらはさっと一掃されてしまうのだった⁽¹⁾。(11 章)

ポズナップ氏は英文学史では当時のイギリスの物質的繁栄を背景にした島国根性と自己満足の象徴であるが、イギリス人が世界でもっとも優秀な選ばれた民であると信じていた人々はヴィクトリア朝に限らず 20 世紀になっても多かったのである。ちなみに、レッシングの父親も生涯イギリス人が選ばれた民だと信じていた⁽²⁾。『イギリス人を探して』では人種と階級の境界線がヴィクトリア朝時代と大差なく厳しく設定されたイギリス社会(Yelin 58)が描かれている。本篇で言及される保守的なイギリス人女性(例えば、ロンドンに帰還して半世紀近くになるレッシングを依然として余所者扱いする女性)の国民感覚も厳密な意味ではポズナップ氏のそれと大差ないのである。

「ロンドンの地下鉄」ではこのように旧態然とした国民気質に言及される反面、グローバル化が進み人とモノが劇的に移動する異文化混淆の社会に対して寛容なイギリス人の日常的反応が淡々と描かれ、最終的には伝統技術の素晴らしさが称揚される。ここではヴィクトリア朝に建設された湿気が多い建物構造の頑丈さを絶賛する配管工まで登場する。『イギリス人を探して』の出版から半世紀近くの時間を経たイギリスでは帝国時代の海外の植民地が次々と独立し、海外の資本と労働力を積極的に受容するポスト植民地主義・ポスト構造主義が隆盛を極め、社会事情は大きく変化している。と同時に、レッシング自身もイギリス文化と歴史に対する理解を深め、イギリス小説の大家の 1 人として社会的評価を得た自負に溢れている。前作執筆の時は「イギリスが最も汚れていたが、

(1) 日本語訳については『我らが互いの友』(ちくま文庫) 間二郎訳を参照。

(2) 拙稿『父の思い出』(江戸川大学語学教育研究所紀要『*Language & Education*』9号, 2011年)を参照。

彼女自身の運命も最悪で、道徳心はゼロ。おまけに幼い子供もいた」(19)。辺境の植民地で育ったレスリングの運命は、イギリス本土におけるポスト植民地主義の勃興と普及とともに上昇したと言っても過言ではない。1992年の時点ですでに大半の植民地はイギリスから独立していた。最後の植民地である香港も1997年には中国へ返還された。レスリングはここではジュビリー線の乗客だけでなく沿線の駅の歴史を英文学史にも言及しながら簡潔に紹介し、ヴィクトリア朝時代に建設された自宅の建物構造への賞賛の形で作品を完結する。そのため、本作品は単なる紀行文でなく、イギリス文化史をテーマにした優れたエッセイとして読める。

2007年に史上最高齢でノーベル文学賞を受賞したレスリングは2013年11月17日にロンドンの自宅で死去した。彼女はイランに生まれ、南ローデシアへ家族で移住後、2度の結婚と離婚を経験し、30歳で渡英し、執筆活動においても実人生においても人種差別と強権政治に反対し続けた。享年94歳。奇しくも、レスリングの死去から1か月足らず後の12月5日、南アフリカにおける人種差別撤廃に生涯をささげたネルソン・マンデラが95歳で亡くなった。生前の2人が出会ったかどうか定かではないが、彼らの数奇な人生と素晴らしい功績は、確かに、グローバル展開が関心事とならざるをえない社会事情のもとで平和を実現するための重要な指針となるのである。

最後に、『ロンドンの地下鉄』を執筆するレスリングの眼差しについて述べたい。レスリングは本篇でも語っているように(本稿54頁参照)1982年来日し、各地で公演した。その間に見聞きしたことの1例として、男性や年長者に媚び諂っているように見える日本の若い女性の抑圧されたしたたかさに言及しているが、彼女の静かな視線が豊富な文学者体験に裏打ちされたものであることは明らかであろう。『暮れなずむ女』(Summer before the Darkness 1973)を翻訳した山崎勉は実際に彼女に会った印象を「小柄で控え目なたたずまいの寡黙な人だったが、じーっとあたりを観察している作家の眼に圧倒される思い

がした」(山崎283)と述べているが、来日後間もない1987年に出版された本作品で紹介される異文化混交の社会の様子は山崎のレスリング観が的外れでないことを立証していると思われる。

翻訳に際して使用したテキストは*London Observed: Stories and Sketches* (London: Flamingo, 1987)に編まれた“In Defense of the Underground”である。なお、本文中の()内の説明は訳者による注釈である。

『ロンドンの地下鉄』

地下鉄の駅近くにあるタバコと駄菓子を売る小さな店でインド人がカウンター越しに若者と熱く語っている。2人は店に入ろうとする客が思わず踵を返すほど怒り、興奮している。

「奴ら俺の車目掛けて擦り寄ってきて、追い越す際に車体の片側のペンキを全部擦り落としやがった。この目で見たんだ。座ってる側だったからさ、運よく。やつら犬のように笑ってやがった。それから、Uターンして戻ってきて、今度は反対側のペンキも擦り落とし、宙を飛ぶように逃げ去ったのさ。窓側の座席にいた俺を見て、薄笑いを浮かべてさ」

「1人でけりをつけるのか」と、インド人は尋ねる。「奴ら俺の兄貴の店を先月メチャメチャに壊しやがった。紙屑に火をつけ郵便受けに入れやがった。店が燃え落ちなかったのが幸い。警察は何もしないしさ。兄貴は警察に電話し、わざわざ警察署まで行ったんだぜ。保護は一切なしだ。だからさ、俺たちが奴らの住処を見つけて、こちらからお礼参りに出向いて奴らの車をぶち壊してやった」

「出来した」と、別の白人が口を挟んだ。「警察は関与したくないのさ。俺は立派に証言したさ。現行犯だったからね。飲酒していたことも言った。でもさ、我々にどうして欲しいのかと、警察は逆に問い返すのだ」

「おまえが白黒つけろよ」と、インド人は言った。

この間わたしは無視されたまま立っていた。彼らは怒りのあまり話を小耳にはさんだ誰かが書き留めるかもしれないということに全く気付いていない。「じゃ、俺も同じ事をやり返すべきかな」と、白人の若者——ビル内で何かの仕事をしているか、あるいは、運転手に違いない——は言う。

「どこに住んでいるのか分かっているなら、かなり大きなハンマーかバールを奴らの車にお見舞いするのさ」

「俺も同じことを考えたよ」

「そんなら、それが一番だ」

「じゃ、そうしよう」それから、若者は店を一旦出たが、タバコを買いに来たのを激怒のあまり忘れていたのか、また戻ってきた。

わたしの接客をしているインド人の心は上の空で、彼の手だけが機械的に動いている。

わたしが店を出ようとする、彼は「毎度ご来店ありがとうございます」と言うが、心の中では「そう、そうだ」と、以前の会話を続けている。

この地域ではインド人の店主は夜になると鎖かたびらのような細かい鉄格子のシャッターを下ろし、店の警備をするが、これは彼に限ったことではない。

今、わたしは公園の遊歩道に立っている。花屋がここに花々をきれいに種類別に並べるので、ここは遊歩道公園でもあるが、苗床作りに最適の晩春の今、花々は大きくなろうと希望に溢れている。1か月早く開花したユリは真夜中を除き終日混雑する北へ向かう主要幹線道路の往来から生じる悪臭に優る強烈な香りを放っている。この道路は2,300ヤード進むのに30分もかかり、そのうえ、車での移動をできることなら避けたいほど汚れている。

わたしが立っている所はつい最近までロンドン中心部から遠く離れていた。何故こういうことを知っているかという、知り合いの年配の女性がメイベル・アーチ駅からここまで日曜日毎に1ペニー払ってバスに乗って来たと教えてくれたことがあったから。「食事代を節約して1ペニー貯めて、バスに乗るのが楽しみでしたよ。あの頃このあたり一面は野っ原で、小川もたくさんありまし

た。靴とソックスを脱いで、水に足を浸し、牛たちを見ていました。牛も群がり近づいて来てわたしたちをじっと見つめていました。それから、小鳥たちは数え切れないほどいましたよ」と、彼女は語った。勿論、これは第1次世界大戦以前のこと、幾多の伝記では黄金時代と呼ばれる時代のことである。文房具店の陳列台に並んだ100年ほど前に撮影された往来の写真をみると今も昔と大差ないが、豊かで平和な現代から見ると、決して貧しくなかった通りも寂しい限りである。今、店頭には派手でけばけばしい安物の衣類が所狭しと並んでいる。近くにはガソリンスタンドがある。絵葉書にはさほど大きくない尊大な建物が写っており、その1階部分は顧客に1人1人丁寧に対応できる造りだが、このような店が姿を消してから久しい。店の外では山高帽子をかぶり、作業用エプロンをつけた男たちがカウンターの奥から呼び出され立っている。これが女性の場合なら、労働者階級の必需品である見栄えのよさが際立つ帽子を被っている。とは言え、ほんの2,300ヤード北東へ離れたところでは、わたしの女友達の日曜日ごとに群がる牛の傍らで両足を冷水に浸していたのだ。「とっても冷たくて、息をのむほどでした。でもね、すぐに冷たさにも慣れ、その日が1週間で最高の日になりましたよ」さらに北へ5,600ヤード進んだところには水車小屋があった。「ミル・レインという名称はここに水車小屋があったから。その小屋ももう引き倒されましたがね」それが何に代わったかを知らなければ、誰も由来に気付かないだろう。もし水車小屋の建物が昔のままに残っているなら、わたしたちもそれを誇りにし、料金を払ってでもそこを訪れ、かつての有り様をしっかりと目にすることだろうに。

駅構内へ入り、普段どおり作動している自動販売機で切符を購入し、長い階段を昇ると、トイレだった場所に着く。しかし、そこは今では修繕するや否や破壊されるので完全閉鎖されている。暖房設備が整った待合室の窓は頻繁に割られ、落書きも絶えない。何でも手当たり次第に壊している間、若者たちは一体なにを話しているのだろうか。——こういう蛮行に走るのは若者、特に青年だ。

彼らは貧困ゆえに不良になるのではない。と言うのも、先日、わたしは北部の有名な大学を訪問したが、そのような大学では学生たちはありとあらゆる種類の職業に1人20件も応募でき、卒業生の99パーセントが卒業後1年以内に定職に就けるのだ。彼らは若者の特権階級に属し、教師たちが嫉妬こそしないまでも明らかに敬服するような活気溢れる独創的な社交生活を満喫できるのだ。それにもかかわらず、彼らもすべてを壊す。大学生のばか騒ぎでは済まない。男は所詮男なのか、わたしには同情を誘うための破壊行為のように思われる。しかし、どのような同情か。理解に苦しむところだ。

構内にある高い屋根付きのプラットフォームに立ち、電車の到着を待っていると、視線の先に木々の先端が見える。一瞬、わが身が天空へ投げ出されたような気がする。日光や、風や、雨が駅構内を駆け抜ける。なんという高揚感。

わたしは地下鉄で移動するのが好きだ。でも、これは胡散臭い表現である。わたしは地下鉄が嫌いで、いつも読書に耽ったり、イヤホーンをつけているから。今読んでいる本の作者もめったに地下鉄を使わず、いくつか駅を乗り過ごさなければならなかっただけで、嫌になった。乱暴なことば。ラッシュアワーの移動中の話なら理解できないわけではないが、通勤時間帯の乗車を経験したことがない人からも地下鉄は酷いと聞かされる。この路線はジュビリー線で、わたしも常に使用している。この線を使うと、15分もあれば都心へ着く。車両は明るく新しい——ええ、まあ、ほとんどだが。標識も分かり易く、チャリング・クロス駅まで残り5分、3分、1分と表示される。プラットフォームは清潔で、通りと同じくらいか、それ以上に、塵ひとつないほどきれいだ。ああ、でも、まず昔の様子を知るべきだろう。当時の地下鉄は今とは全然違っていった。

知人の老女というか淑女と言った方がよい女性はこんな風に言っている。「あなたのような人は」わたしが40年以上ロンドンに暮らしているにもかかわらず、彼女はわたしを異邦人あるいは外国人扱いしている。「当時のロンドンを知らないで

しょう。ロンドンの端から端まで半クラウンでタクシーでも移動できたのよ」（エリザベス1世の時代には数ペンスで羊1頭が購入でき、さらに時代を遡るとローマ人は銀貨1枚で大邸宅を購入できたのだ。郷愁に耽る人間の想像の世界では通貨価値が落ちることはないのである。）「すべてが美しく、新しくないものはなく、人々は人情に溢れ、バスはいつも定時に動き、地下鉄の料金も安かったのです」

1920年代にはこの女性もまだ若く、ロンドンの粋な若者文化の担い手の1人だった。過去を美化し熱い思いを語る彼女の顔はとてもやさしかったが、わたしや他の人の賛同を求めているわけでもなく寂しげだった。誰1人として信じないなら、楽園の島に暮らす意味とは何だろう？ 過去を讚美する彼女の歌うような声を聴いていると、パステルカラーの口紅をさし、頬紅をはたき、鏡で髪を波立たせ、花卉の縁取りがある洋服を着た可愛い少女たちの姿がところに浮かぶ。彼女たちはパーティからパーティへと飛びまわり、チップ1ペニーのためなら喜んで車を転がす運転手のタクシーから出たり入ったりした。このような女性たちがウエスト・ハムステッド駅やキルバーン駅のような北部へ来ることはめったになかったし、また、ハムステッドはD. H. ロレンス（英国の小説家・詩人、1885-1930）の物語では数多くの芸術家や作家の居住地になっているが、実際、当時はまったく冴えない場所だった。当時の社会事情について驚くべきことは、大富豪を別格扱いにしても、中産階級と労働者階級には異なるロンドンが存在していたにもかかわらず、思い出話に耽る人々はその境界線に全然気付いていないように見えることである。「子どもの頃は階段を東子でゴシゴシ擦ったものよ。積雪の中でさえ素足のまま掃除したので、寒さで足が青くなることもあったし、パン屋へ行って前日のパンを格安で買ったし、可哀そうな母は1日16時間、週6日間奴隷のように働いたのよ。あの時代は本当に邪悪で残酷な時代だった」「ロンドンに住んでいることがかつては誇り。でも、今じゃ怖い人々に溢れかえる恐ろしいだけの所よ」

わたしが座っている車両には3人の白人を除けば、座席の半分ほどを黒色やら茶色やら黄色の有色人種が占めている。別の分類方法によると、女性5人と男性6人、あるいは4人の若者と7人の熟年男女となる。2人の日本人少女は子猫のように人当たりがよく満足きった笑顔で座っている。昔のロンドンが懐かしい人ならば、礼儀正しく清潔な日本人に拍手喝采するだろうか。おそらく褒めないだろう。というも、ロンドンのこの地域には外国人は1人もおらず、住んでいるのは皆イギリス人だったから。この辺りにはショー（アイルランド生まれの英国の劇作家・批評家、1856-1950）が「酔っぱらった中年男たち」と呼ぶ輩が仲間といつも集っていたのだ。大英帝国は未だ内部崩壊せず、外界からの侵入もなく、どこか家庭でも少なくとも身内の1人は海外に出て、植民地や自治領の管理をしたり、陸海空軍に入隊していたが、それは国外であり決して国内のことではなかった。植民地人は未だ故国へ戻り、ねぐらにつくことはなかった。

日本の少女たちは眼に見えない泡の中において、その安全な世界から外を見ている。日本を訪問した時、大勢の若い女性たちと会ったが、皆キャー、嬉しいと言うのに精一杯だった。クスクス笑い、上へ下へとび跳ね、まあ、ステキ、カッコいいなどと優しい甲高い声で喜びや驚きを表現していた。しかしながら、彼女たち自身は鋭い人生観をもった頑健な女性だった。教師やら教育係が常にまわりをうろつき、彼女たちを群れに連れ戻し、安全な団体の1員にしていたので、彼女たちの生き方は決して安易ではなかったのだ。

黒人の若者が1人。彼は両目を閉じ、耳にウォーマンをかけ、未知のリズムに合わせて足を激しく揺すっている。彼の服装は車両にいる他の誰よりも高価で粋である。彼の隣には10歳くらいの少女を連れたインド人女性がいる。2人は砂糖菓子のように艶々した茶色の腹部を見せるサリーをかぶり、その上からカーディガンを羽織っている。蝶のように艶やかなサリーと地味で平凡なカーディガンとの組み合わせは、北の寒い国に住む罰のようだ。サリーとカーディガンほど悲しい衣装の組

み合わせはないだろう。彼女たちは座って静かに話しているので、娘も母親と同じく大人のようにだ。3人はフィンチリー・ロード駅で下車し、ジーンズにTシャツ、スポーツ・シューズというお決まりの服装のアメリカ人が4人、つまり、少年2人と少女2人が乗車して来た。彼らは大声で話し、他の人には見向きもしない。2人は座席に腰掛け、足を前に投げ出し、後の2人は両脇からだらりと寄りかかっている。彼らの反対側の座席には、スコットランド人とおぼしき背の高い老齢の女性が丁寧に磨いた靴を左右揃えて座り、車輪付き買い物かごの把手を骨太のしっかりした両手で握りしめ、騒々しい若者など存在しないかのように前方をじっと見つめている。おそらく昔を思い出しているのだろうが、どんなロンドンなのか？戦争のことなのか？（おそらく第2次世界大戦だろう。）とにかく、貧困にあえぐロンドンでないことは確かだ。彼女は絹のシャツとツイードのスーツを優雅に着こなし、指輪も立派だ。彼女と4人のアメリカ人はセント・ジョンズ・ウッド駅で下車。若者たちはアメリカン・スクールへ急ぎ、彼女は多分近辺に住んでいる。ゴールズワージー（英国の小説家・劇作家、1867-1933）によると、セント・ジョンズ・ウッドにはかつて金持ちや立派な暮らしができる男性が女性を愛人として面倒をみた小奇麗な屋敷があった。今日では金持ち、大抵の場合、アラブ人だけがこのような屋敷を購入できるのだ。

電車が乗客を待って停車している間に、わたしは最近セント・ジョンズ・ウッドのホテルに滞在していたフランス人の友人を訪問したこと思い出した。受付に立っていると、白衣のアラブ人3人が山のように積まれた米飯の上に羊の丸焼き肉を乗せたトレイを肩の高さに掲げ、ホテルの裏手から現れエレベータに乗った。香辛料と焼き肉の匂いがロビーに充満した。わたしの問いかけるような眼差しに応えて、受付係は言った。「これは何んとかというどこかの族長の特別注文なのです。毎晩大宴会をお開きになりますからねえ」それから、彼女は電話でボーイフレンドと中断したお喋りを再開した。「まあ、どうしてそんなことを言

うの。男ってそんなものよ。あなたに教えてもらうことなんて全然ないわ——彼女にとっては真新しい出来事だったのだろうが、歴史的発見でもあるかのようにこんなことを言っていた。鶏の卵ほどもある大きな琥珀色の人工石の指輪が輝く白い手はその間左耳上の髪を撫でていた。琥珀色の艶々した髪は1920年代風に短く切られていた。別の4人のアラブ人がロザリをかけた尼僧のように世俗を否定するかのように長い茶色の指で数珠をいじりながら入って来た。彼らは下世話な会話に加わり、笑ったり頷いたりしながらも、その唇は「聖母マリアさま…」と唱え、指はしっかりと数珠を握り、自らの行為を正当化していた。アラブ人たちが宴会場に向かうためにエレベータの中へ消えると、回転式ドアからさらに4人のアラブの長老が入って来た。

ここから遠くないアビー・ロードにはビートルズがレコーディングに使用したスタジオがある。歩行者道路の交差点は4人組みのおかげで有名になり、今ではいつもあらゆる年代と人種の観光客の小隊が立ち並び目を皿にして、指でカメラのシャッターを絶えまなく切っている。世界中の何万何千という写真アルバムにはこの薄汚れた境界の写真が大事そうに貼ってあるのだ。

ロンドンのこの地域の歴史は浅い。愛人や高級娼婦たちの大邸宅が増えていた頃、ここは新しくできた郊外だった。NW6またはNW2からロンドンの中心部へ移動すると、比較的最近できた住宅地からローマ時代以前から栄枯盛衰を繰り返してきた懐かしいロンドンに風景が変わる。かつてグラッドストーン（英国の政治家；自由党首相、1809-98）が住んでいた大邸宅は今では報道記者のクラブ会館になっており、わたしはつい最近ここで昼食をとった。社交界デビュー等々の公式儀式のために建てられたような大邸宅に一家が暮らしていたと想像するのは難しい。特にカールトン・ハウス・テラス通り⁽³⁾に立つと、「つい最近まで

このあたりに森があり、小川が流れ、動物が草を食んでいた」とは到底想像できない。緑豊かな自然は商店街を縦横に跨ぐ仰々しい階段のはるか後方に退き、セント・ジェームズ公園の所定の場所に小さく収まっている。建物や舗道や道路に自然は押しつぶされ、セント・ジェームズの森という名前に相応しい自然を思い浮かべることができないのだ。「このあたりには森があったにちがいないが、セント・ジョンって誰だ？ 多分、教会だろう」木々がその森の生き残りだと容易に分かるだろうか。分からないかもしれないが、しかし、全く分からないというほどではない。

今日、わたしはここで下車しなくて幸いだ。エスカレーターが作動しないことは多々ある。ほんの1か月前、業務用黒板の1つに乗客への伝言が上品に白チョークで書かれていた。「エスカレーターが度々動かないのを不思議に思っているかもしれません。その疑問にお答えいたします。エスカレーターは老朽化し、しばしば故障中なのです。ご迷惑をおかけし、申し訳ございません。気をつけてお出かけくださいませ」ロンドン式ユーモアに溢れたメッセージは無慈悲な残酷さのゆえに逆に乗客の気分を盛り上げ、彼らを徒歩で長い階段を降りさせた。

3人の若者が車内に飛び込んで来た。チンピラ。無法者。ギャング。16歳くらいの青春真っ只中の少年たちは荒れ狂う性と凶暴さを露骨に表し、耳障りな笑い声を怒鳴るようにたてる。2人は白人、1人は黒人。彼らの喚き声とゲタゲタ笑いは彼らの目論見どおり周囲の注目を引く。白人の1人と黒人が互いに押し合い圧し合いしている間、3人目の若者はまるで映画かテレビのヒーローのようにキリスト教の洗練された受難者でもあるかのような笑みを浮かべ、諦め顔で他の2人を見ている。彼らが話すことばは言語障害者のことばのように未発達であるため全然理解できない。おそらく故意にこんな話し方をしているのだろう。16

(3) トラファルガー広場から西へ延びる通りにはロンドンの紳士クラブがたくさんあり、カールトン・ハウス・テラスもその1つである。シャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes) を主人公にした

コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle 1859-1930) の推理小説では度々舞台となる。この近辺はドイツ大使館関係の建物が多いことでも知られている。

歳の若者が大人の理解を望むとは思えない。但し、単なる悪ふざけが暴力と紙一重であるため厄介だ。ペーカー・ストリート駅で2人の苛めっ子が3人目の少年を車両から追い出し、乗せまいとしている。ところが、この駅はロンドン郊外へ通じる路線に乗り継ぐ多目的乗換え駅であるため、電車の停車時間が長く、事はそう簡単に運ばない。もみ合いに疲れた3人は車内に戻り、ドア付近に陣取り、他の乗客が乗車するのを控えめに邪魔する。乗車しようとする客たちは大柄な若者たちを眼前にして「ちょっと通してください」と言うが、彼らは攻撃も抵抗もしない代わりに微動だにせず、自分たちが嫌われ者だと納得して、不満の声や怒りの眼差しを何食わぬ顔で無視する。ドアが閉まり始めると、2人の苛めっ子は苛められっ子を車両から押し出し、彼にありとあらゆる口汚い罵詈雑言を浴びせ、電車が動き出すと身振り手振りで彼を馬鹿にする。プラットフォームに置き去りにされた若者も負けずに応戦し、電車の進行方向、多分、彼らが申し合わせた目的地を指差す。電車のスピードが上がるにつれ、彼の走りは覚束なくなり、彼は人差し指と中指の2本を曲げ、手の平を上向きにしながら電車の後を追い、踊るようにホームを走る⁽⁴⁾。車内に残った2人はすることがなく寂しそだが、だらしなく席に腰掛け、次の爆発のために活力を温存している。実際、電車がボンド・ストリート駅に到着すると、彼らは凶暴なカンガルーのように奇声を発しながら電車から飛び降りる。一体誰に向かって奇声をあげるのか。それが大事なことなのか。2人が座っていた座席には人目を引く広告のように色鮮やかなジュースの缶が2個ころがっている。車内には少年たちの一連の蛮行を目撃しなかった人々が乗り込んでおり、もうあの年頃に戻る必要がないことを神さまに感謝しているようだ。それとも、あの頃に戻りたいのだろうか。つい先ほど見た光景を遺憾に思

うと同時に、無限の可能性を秘めた心的光景の一部として記憶し、若返りたいとため息をつけるのだろうか。

下車する乗客が多いボンド・ストリート駅では電車がかなり長い時間停車するので、広告欄に掲載された地下鉄会社の宣伝用の詩をじっくり読むことができる。

鷲⁽⁵⁾

鷹は曲がった指で巖頭を掴み、
寥々たる土地にて太陽に近く、
碧天を背景にして佇立す。

さざなみ立つ海面は眼下に展がり、
山の絶壁から俯瞰するも
忽ち雷のごとく急降下す。

アルフレッド、ロード・テニスン

(英国の桂冠詩人、1809-92) 作

デンマークから来た小学生の一団が遠足らしく電車に乗って来る。彼らは行儀よく、年齢的に彼らと大差ない笑顔が美しい女性に引率されている。この一団は整列するとグリーン・パーク駅で下車し、電車は再び別の乗客で満員になる。全員が観光客。地下鉄がとても汚いという不満の所以はこれだろうか。イギリス人の外国人嫌いの再発だろうか。旧世代のイギリス人なら確かにそうだ。わたしには世界中の人々が集うこの変化に満ちた多様性こそが興味深く、時に草原の上に漂う雲の移ろい易い影をじっと眺めているような気がする時があるが、彼らの何をこんなに憎悪するのか。

ところで、このように怯えている人も実際には

(4) 日本では人差し指と中指の2本を立てるとVサインを意味するが、英語圏ではVサインをした手の平を上に向け、指を少し曲げると相手を非常に侮辱する意味になる。例えば、女性に対して向けられると強姦の意味にもなると言われている。

(5) アルフレッド・テニスン (Alfred, Lord Tennyson) の「鷲」の日本語訳は西前美巳編『テニスン詩集』(岩波文庫、2003年、187頁)を参照。テニソンは1850年から92年まで桂冠詩人として広く名声を馳せ、初代準男爵に任ぜられた。「鷲」(原題“The Eagle”)は1851年の作。

結構うまくやっていると思う。先日、ある出来事に遭遇した。場所はロンドンにある大病院の老人病棟。「老人病棟へ行く途中なの」と、若くて健康な女性の看護師がエレベータのボタンを押そうと指を伸ばしながら別の看護師に言った。転落事故で運び込まれた白人の老いた女性がちょうどおまるを手渡される場所だった。事実、彼女は非常に高齢であるため小奇麗なピンクとグレイの患者用の制服を着用し、失われた楽園の住民権を取得していたばかりか、労働者階級出身の独身女性でもあった。(役所の古い帳簿には女性の身分は今でも独身女性と記載されている) 誇り高い女性にとって、カーテンを引かず人目に晒され、公衆の面前でおまるを使用するように催促されることは辛いことだった。しかも、男性の看護師に世話をやかれようとは考えもしなかっただろう。最悪なのは彼が看護師の制服を着用し、若く物静かだったにもかかわらず、黒人だったことだ。「わたしは医者でなく、看護師です——そうです、看護師です」彼はベッドカバーをめくり、老婦人がおまるに跨がるのを手助けし、ガウンの裾を太腿まで下ろし、カーテンを閉めた。「すぐ戻りますからね」そう言って、彼は立ち去った。数か語がいつも飛び交う礼儀に無頓着なロンドンに住み慣れた人々でも、好き嫌いは別にしてカーテンの影で繰り広げられたであろう心の葛藤を想像するのは難しくなかった。彼が戻ってきてカーテンを開け、大丈夫ですか——もう少しきれいに拭きましょうかと尋ね、おまるを片付けると、彼女の眼は威厳に満ち、挑むようにキラリと光った。彼女は不可能なことをどうにかやり遂げたのだ。「いいえ、大丈夫です。そんなことは他人の手を借りずともできますから」

友人の1人が理事をしているロンドン南部の学校では25ヶ語が使用されている。

現在、わたしたちはロンドン旧市内の地下を走行している。とは言え、東へ2、3マイル外れているので最古のロンドンではない。庭土にウジ虫や木々の根っこが混じるように、パイプ、銅線、下水道や老朽化した建物等々の堆積物がいっぱい詰まった厚い岩棚の向こう側にはセント・ジェイ

ムズ公園—ダウニング街—ホワイトホール⁽⁶⁾がある。この地下の美術館を一巡し再び地上へ戻れないとしても、ここに生命と生活に必要なすべてがあると容易に想像がつく。SF小説では太陽と月が数百年に1度現れる惑星があり、その住民たちは奇跡を待っている。勿論、この奇跡は彼らを取り巻く宇宙の状況に関するもので、司祭だけが支配権を掌握している証として啓示を知る。また、地上にそびえ立つ建物を真似した地下都市もある——例えば、テキサス州ヒューストン。地味なドアを夢見心地で通り抜けると、小売店やレストランや会社の建物が林立する地下何マイルの街に入る。地上に昇る必要はない。事実、地下のアパートを好み、そこに住み、カーテンを引き、明りをともし、自分だけの地下の世界を創る人は地上生活を監獄や病院から解放されたばかりの人が普通の生活を危険視するように拒否する。彼らは自らを地下に強制収容し、すべてを自ら制御できる空間、つまり、他人の批判的な視線から逃れ、不安定な天候を遮断し、光の変化を閉めだす静かで閉ざされた空間を創る。但し、ガス漏れや電話回線の混乱不通といったインフラの機能不全がないという条件つきだが。

50年代に終日電車の環状線に乗っていた男性のことを覚えている。彼は朝9時から夕方6時まで日々規則正しく電車に乗ることを仕事にしていた。「やつら」には分からない、と言っていた。神経衰弱に罹っていたのだが、彼以上に想像力豊かな神経衰弱を病んだ人はいないだろう。彼の場合、仕事上のひらめきも時にはあったようだ。数日前、ヒース駅でサクソン人——まあ、サクソン人が着用したかもしれない衣服を纏った青年——が近づいて来た。ウールの茶色のシャツ。その上

(6) ホワイトホールはトラファルガー広場からチェルシーへ向かう道路で、日本の霞が関と同じく政治の中心地区であり、多くの政府官庁の建物が立ち並ぶ。首相官邸があるダウニング街10番地も近くにある。ちなみに、この地は1682年にジョージ・ダウニング卿が購入し、開発した。1732年に初代首相ロバート・ウォルポール卿が時の国王ジョージ2世より与えられたダウニング街の邸宅に住み始めて以来、その邸宅は歴代の首相官邸として機能している。

にはベルト付きのダンボール紙でできた胴着。ふくろはぎの上部をゴムバンドで締めたズボン。修道士のフードに似た茶色のスカーフ。手には玩具屋で買った槍。「だんな、どちらへ行きなされるのだね」と、わたしの連れが幾分時代遅れの口調で彼に尋ねた。若者の連れの女性は心配顔でじっと彼を見つめていたが、彼は足を止め、満面の笑みで答えた。「どこか遠くへさ」

「お名前はなんとおっしゃるのかな。ベオルフ(8世紀頃の古英語による英雄叙事詩の主人公)殿かな? 赤のオラフ(ノルウェー王, 995?-1030)殿かな? それとも、勇者エリック殿かな?」

「黒のオラフさ」

「本当の名前は違うでしょう」と、彼の相棒は彼を現実の世界に戻そうと考え、訂正した。

「いや、そうさ」2人はこんな会話をしながら、1990年の赤褐色、黄色、枯れた草木の緑色といった忘れられないほど彩り豊かな秋へとさ迷い消えた。「おれの名前はエリックだろう? だったら、勇者エリックでいいじゃないか」

チャリング・クロス駅⁽⁷⁾で乗客全員が下車。階段のはるか下から駆け上がってきた少女が改札口に現れ、目覚まし時計のように甲高い声で喋り散らす。彼女は注目的になるが、ビービーという電子音も大きく鳴り響く。勿論、これは火災警報。最近では識別不能なほど多くの電子音がチーチー、ジージー、ブーブーと鳴り響く。少女は妖精のような子で、赤く火照った顔のまわりにはブロンドの巻き毛がふんわりと踊っている。彼女は眩暈がするほど笑いこけ、他の若者たちと競い合って、鳥の群れのように夜の冒険を探しにウェスト・

エンドへ向かう。彼女たちはすでに快樂に狂喜し、異次元のスピードと軽快さで花火のようにパッと上へ昇り、姿を消す。彼女と連れの2人の少女が切符を自動改札に差し入れ、地下道から地上へ飛び去ると、残った3人の少年は飛び上がって勝利の雄叫びをあげる。ヒラヒラ舞う蝶を叩き落とすのが狂気の沙汰のように、傍らに居る大人たちは彼らの若さゆえに素知らぬ顔をする。

トラファルガー広場へ向かう地下道を少し進むと、壁際の一角で若者たちが腰を曲げ屈んだり胡坐をかいたりして、箱の上に並べられた小物類や布切れを手にして吟味している。指輪、イヤリング、腕輪、ブローチ、真鍮やガラスや白色合金や安価な銀でできたけばけばしい品々。安っぽいけれど希望と可能性が一杯詰まった品々。

トンネルを通り抜けて階段を昇ると、トラファルガー広場に出る。前方に見える灰色の空間の真ん中で力なく少しばかりの水を噴いている噴水の近くにはナショナル・ポートレート・ギャラリー⁽⁸⁾がある。空は薄青色にキラキラ輝き、移ろい易い雲は地上の静かな生活レベルよりはるか上空で強風に吹き飛ばされ散尻になる。美術館を1つか2つ訪れ、気儘に時間をつぶした後、最後に左に曲がってナショナル・ギャラリーへ向かうか、あるいはさらに50歩進んで歴史上の人物と御目文字するか決めよう。美術館から外へ出る頃はまだ日差しがあるが、空は午後も遅い暗色になる。カフェを見つけ、知り合いと待ち合わせ、それから…あと1時間もすれば劇場か国立オペラ座の幕が上がる時間になる。何十年という年月が経った後でさえ、幕が上がり劇場の照明がつく瞬間の興奮に優るものはない…あるいは、劇場へは行かずその辺りをぶらつき、通勤時間を避けて帰路につくこともできる。

先日、通勤時間の最も人が混む時に電車に乗り

(7) ジュビリー線のチャリング・クロス駅は1979年5月1日に開業し、1999年11月19日に廃止された。旅客の混雑を避けるためにジュビリー線をチャリング・クロス駅から南東へ延伸する計画は1970年代から90年代にかけて変わり続け、その結果としてチャーリング・クロス駅とグリーン・パーク駅間を支線化し、ストラトフォード駅まで延伸することができ、ジュビリー線の各駅はほかの路線と乗り入れ可能になったが、チャリング・クロス駅は新路線から外れ、廃止になった。レッシングが本作品を執筆・発表した1992年の段階では駅は以前使用されていたが、現在は廃止されている。

(8) ナショナル・ポートレート・ギャラリー(National Portrait Gallery)にはレナード・ウィリアム・マッコム(Leonard William McComb 1930-)によるレッシングの肖像画(1999年制作)が2000年1月以降Room 35に展示されている。本作品が発表された1992年にはまだレッシングの肖像画の展示はなかった。

吊革に掴まっていた。車両にいた乗客の半数に相当する14人が読書していた。そのうち3人は単行本を読み、残りの人は皆新聞を読んでいた。午前の出勤時なら愛国心から、『タイムズ』紙（ロンドンの新聞、1785～）、『インディペンデント』紙（ロンドンの日刊紙、1988～）、『ガーディアン』紙（英国の自由主義的進歩の日刊紙、1821～）、『テレグラフ』紙（英国の日刊紙、1855～）他が読まれるが、恥じ入るような低俗紙はあまり見かけない。電車通勤においては、少なくともある時間帯あるいは期間には階級上の境界線が存在するのだ。夕方になると『イブニング・スタンダード』紙（ロンドンの夕刊紙、1829～）がこのリストに加わる。本を手をしている3人。右手の男性は『イーリアス』（ホメロスの作とされる古代ギリシャの叙事詩）を読み、通路の向かいの女性は『モービー・ディック』（米国の小説家メルヴィルの小説、1851）を読んでいる。他の乗客をかき分けて降る時、生れたばかりの赤ん坊を胸に抱いた女性が赤ん坊の頭越しに『嵐が丘』（英国の小説家エミリー・ブロンテの小説、1848）を読み耽っているのに気付いた。現代の無知無教養を苦々しく愚痴る人々にこの読書光景を語ると、彼らは疑わしそうな反応を示しながらも気を良くする。

車内広告には次のような詩がある。

「喜び」という名の幼な子⁽⁹⁾

ぼくには名前がないんだ
まだ生まれて2日だから
おまえは何て呼んでほしいの
ぼくは幸せだよ
喜びがぼくの名前だよ
すてきな喜びがおまえの上に訪れますように！

かわいい喜び！
生まれて2日しかたっていないすてきな喜び、

(9) ウィリアム・ブレイク (William Blake) の『『喜び』という名の幼な子』の日本語訳は松島正一編『ブレイク詩集』（岩波文庫、2004年、69頁）を参照。原題は“Infant Joy”。

すてきな喜びと呼んであげよう。
おまえは笑い
そのあいだに私は歌をうたう、
すてきな喜びがおまえの上に訪れますように！

ウィリアム・ブレイク

（英国の詩人、1757-1827）作

地下鉄の駅を出て徒歩で家に向かう時、教会を3つ通り過ぎる。そのうち2つはもはや敬虔な信仰心の泉では無くなり、劇場とゴミ置き場に代わっている。ロンドンの小さい地区に3つも教会があるとは……あの世から70年ぶりに帰還した者ならば比較能力を発揮して「一体なんのためにあるのだ、こんな建物が。互いに酷似しているにもかかわらず、他のすべての教会とは全く異なるこのような建物が1つの地区に数軒あるとは驚きだ。市町村関連の建物だろうか。それとも、政府機関の建物か。いずれにしても新たに建設されたものだ！」と不思議がったにちがいない。もっとも昨今ではこのような人は男性であれ女性であれ、あるいはそのどちらでもない場合であれ、教会がしばしば廃墟であることに気付くだろう。「政変があったのだろうか？」これとは逆に、ある特定の建物はロンドンの端から端まで繰り返し現れる。「最後に来た時も酒類を売る『パブ』と高速鉄道のセンターはあった。今は金属製の昆虫やゴキブリのような電気器機の販売センターがあるが、これらは以前にはなく、全く新しい。もう1つ新しいものがある。数ヤード毎に並ぶ薬品や化学製品の販売センターは以前無かった」奇妙な商売だ——と彼ないし彼女、あるいはそのいずれでもない者はカノープス座⁽¹⁰⁾にファックスで送信す

(10) カノープス座 (Canopus) はシリウス座に次いで明るい星であり、竜骨座の主星、南極星。レスリングはこの星座を題名にしたSF小説シリーズ『アルゴ座のカノープス——古文書』(The Canopus in Argo: Archives, 1979-82) では第3ゾーン（平等主義の母系社会）、第4ゾーン（戦闘主義の父系社会）、第5ゾーン（野蛮な部族主義）を設定し、異星人の間におけるコミュニケーションの可能性を探求している。

る報告書の項目を頭の中で整理しながら考える。「頻度順に並べるなら、薬局が1番先にくる。飲食物には多くの化学物質が添加されているからかもしれないな。」実際、我が家の1マイル四方には少なくとも15軒の薬局があり、食品雑貨店には必ず薬棚があるのだ。

角を曲がりかつて水車小屋があった辺りを過ると、北へ向かう自動車の悪臭と騒音から解放され、息苦しさを忘れる。今日ミル・レインでは賃貸料と公共料金が3、4倍に急騰したため絶えず新しい店が現れては消え、持ち主も代わる。この通りを過ぎると一戸建ての家がひしめき合う小道になり、往来の物音は絶えないがずっと静かになる。この通りの名前は古典的で、アガメムノン（ギリシャ神話に登場するトロイア戦争のギリシャ軍総大将）、アキレス（ギリシャ神話の英雄）、ユリシーズ（ギリシャ神話の武将）、オレステース（ギリシャの悲劇詩人アイスキュロスの作品）の厩というのがある。さらにゴンドル（エチオピアの元首都）というのもあり、古典教育を受けた軍人が通りの命名を任されたのではないかと考えたくなる。事実、この推測は当たらずといえども速からずで、話はこうだ。（嘘か本当かは誰も気にしないだろう。過去の話は大昔のものであれ最近のものであれ、辻褄が合うように整理し語り継がれるものだ。）その昔、ある田舎に妻と沢山の子どもがいる小地主の退役軍人がいた。彼には町にも愛人とさらに多くの子どもがいた。彼は子どもたち全員を教育するために資産を増やそうと企み、ロンドン一帯が見渡せる丘陵に広々とした農地を購入し、北部で最初のベッドタウン地帯と呼べるものを建設した……思い出して下さい。丘陵からロンドンに向かって流れる溪谷はかつて小川や緑の草原が牛が群れをなすほど豊かで、わたしの知り合いは日曜日ごとに1ペニー払ってバスでそこへ出向いた。シティへの通勤には馬で引かれたバスや汽車が使用された。

当初のアパートを大邸宅に改造した建物もあるが、大部分の建物は3部屋構造である。このような建物がどのように使われていたかはよく分からないが、地下室はどこも湿気が多い。わたしの家

でも瓶のラベルは3か月で剥げ落ちる。そこは便所だったのだ。でも、誰が使用したのか？ こんなに汚らしい洞穴で生活できる人が居たとは考えられない。それとも、当時は湿気がなかったのだろうか。現在はセメントの床がデコボコになるほど湿気が強いので、地中に丸い穴、つまり、小さな立坑を空けている。だから、その穴から上下する水面を覗くことができる。原因は降雨量が多いためではない。我が家の最上階の窓から見える貯水槽は木々で囲まれているため緑が延々と広がる草原の村のようだが、地元の人々は皆潮の干満と貯水槽の管のひび割れがなんらかの因果関係にあると考えている。ヴィクトリア朝の人々は水槽を地下に掘ったのだ。（噂によると、貴重な水の守番と知り合いになれば、小さな通用口から中へ入れてもらえ、低い天井から薄っすらと光がさす真黒な水辺に立てるそうだ。しかも、まるで芝居のように突然の光にびっくりしたネズミがポチャンと水に落ち、波紋を一筋ゆっくりと広げながら泳ぎ去る光景も余興の1つとして眼にすることができる。）我が家の最上階は屋根裏部屋を改造したものである。改築前の構造では、3階にある3つの寝室のうち1部屋は狭すぎて住めなかった。2階にある現在1部屋に造り直した2部屋はおそらく居間兼食堂だったのだろう。台所は快適だが、ベランダというか最近増築したパティオから離れているため不便だ。昔は台所ではなかったのだ。増築した1階の1部屋はかつて2部屋だった。ガーデン・ルームはかつて子ども部屋だったのだろう。遠いむかし、どこの家庭でも子沢山で、同居している親類縁者の数も多く、しかも、中産階級の家庭では少なくとも1人、あるいはもっと多くの使用人もいた。彼らはどのようにして一緒に住んだのだろうか。調理はどこでしたのか、食料保管室はどこにあったのか、洗濯はどうしたのか？ 暖房はどうだったのか？ 部屋にはそれぞれ小さな暖炉があり、暖炉には極めて小さい火かごがあった。

この地域では100年前に初めて家屋の建造が始まった。家は丈夫で厚い壁から出来ているので、屋根や配管の修理に来る業者は建付けが良く、材

料も申し分ないと言う。「今じゃこんな風にはとても建てられやしませんぜ」職人は湿気の多い地下室にも全く失望しない。「基礎部分の泥の品質を良くして湿度を適度に保てば、今年の夏のような猛暑でも決して縮むようなことはありませんや。心配しなさんな」

角を曲がって我が家のある通りに入る頃には、夕日が雲をさまざまな色に染める。このような日没を見ていると、控え目に言っても、心が和む。

角の家には蔦がからまり、そこに住み付いたムクドリの大群は大空に輪をかき、あちこち飛び回り、まもなく完全に姿を消す。あたりは夜明けまで物音1つしない静寂につつまれる。

引証参考文献

I. 文献資料

- ディケンス, チャールズ『我らが共通の友』(上巻)
間二郎訳, 東京, ちくま文庫, 1997年。
テニスン, アルフレッド『テニスン詩集』西前美巳編,

東京, 岩波文庫, 2003年。

レスリング, ドリス『暮れなずむ女』山崎勉訳, 東京, 水声社, 2007年。

ブレイク, ウィリアム『ブレイク詩集』松島正一編, 東京, 岩波文庫, 2004年。

Lessing, Doris. *In Pursuit of the English*. 1960; London: Flamingo, 1993.

_____. *London Observed: Stories and Sketches*. 1987; London: Flamingo, 1993.

Yelm, Louise. *From the Margins of Empire: Christina Stead, Doris Lessing, Nadine Gordimer*. Ithaca: Cornell Univ. Press, 1998.

II. ウェブ資料

『ジュビリー線』

<http://www.davros.org/rail/culg/jubilee.html>

『ドリス・レスリング』

<http://lessing.redmood.com/biography.html>

『ロンドン地下鉄』

<http://tfl.gov.uk/corporate/modesoftransport/londonunderground>

『Doris Lessing by Leonard William McComb』

<http://www.npgprints.com/image.php?imgraf=13572>

A Japanese Translation and Interpretation
of “In Defense of the Underground” (1987)
by Doris Lessing

MATSUMURA Toyoko

Abstract

“In Defense of the Underground,” one of the stories compiled in *London Observed: Stories and Sketches* (1987), is an imaginative, witty sketch of fast-moving and lively modern London so much that the reader cannot help but see this short sketch of a ride on Jubilee Line of the London Underground as a brilliant study on the history of the city.

At the beginning of the story, the writer gets on the train at West Hampstead, which runs through St. John’s Wood to Charing Cross. Referring to well-known figures and episodes in English literature and history, Lessing tells the reader how the passengers coming from not only European but Asian countries behave on the train and how the English responds to them. So exciting is the starting point for a survey of how both the suburbs and the urban areas along the line have changed in modern times. The story ends with an appreciation of the Victorian style and construction of Lessing’s own house. In a sense, this sketch may be read as taking the role of an enlightening tour guide to London, one that surely helps us imagine everyday life in London, past and present.

With her colonial background, Lessing can represent the ever-changing London from a detached but warm-hearted viewpoint. She is never baffled by the deep difference between modern societies and traditional ones, but finds in today’s London an everlasting link between the past and the present. Even after her death on November 17, 2013, at the age of 94, Lessing will be remembered as one of the great writers of the 20th century and as a strong-minded pacifist.

The main purpose of translating “In Defense of the Underground” into Japanese is to convey London’s calm but positive response to their changing city so as to encourage the Japanese, who seem to be rather bewildered by globalization, not to be hesitant to participate in either official or private activities overseas.